Toru HIRAKAWA; Studies on Marriage in Toshima
Island of Izu, Tokyo.
Part III. The Range of Mating
in Toshima Island

一 島 嶼 (伊 豆 七 島 利 島) に 於 ける 婚 姻 の 調 査 研 究

第 3 報 通 婚 圏

東京医科歯科大学医学部農村厚生医学研究所
(主任研究員 柳沢文徳教授・主任研究員 宮本璋教授)

平 川 達

緒 言

東京都下利島村は太平洋上に於ける 隔絶された孤島に位している為に、農村厚生医学的見地からも多くの興味ある課題を有していることは既に述べてきたところである。婚姻に関する調査研究は、共同研究者の徳山¹⁾、岩井²⁾により夫々山間村、海浜村に於ける婚姻の特異性の解析が行われているが、著者は島嶼の一例として本村のそれを担当し、既に第13)、第2報⁴⁾として村内の家系及び婚姻の実態に関して報告した。今回は詳細に検討を重ねて来た本村の通婚圏に関する調査研究が終了したので茲に報告する。

既報の如く、本村内の家系に関して調査研究を実施した成績によると、村内の姻戚関係はかなり濃厚であり、明治以降の調査によつてさえも、何等かの世代で各世帯は相互にそれぞれの家系と繋りをもつておるという事実を認めたことから、当然本村民の通婚圏は狭小であろうと推測されるところである。之等の調査研究の成果に基づく考察による迄もなく、基礎調査資料^{5) 6) 7) 8)}によつても明かな如く、地理的条件に基づく交通上の制約を

はじめ種々特殊状況下にある村落であるので、その婚姻の範囲が狭小であろうことは容易に推定されるところであり、本村の通婚圏の調査研究は極めて興味ある諸問題を多く含んでいるものと考えられる次第である。

資料並びに調査方法

明治5年以降、昭和32年1月迄の全婚姻243件を対象に、さきの家系に関する聞き込み調査と同時に併せて通婚状況を調査した材料を基礎資料とした。農村に於いて出婚の調査は甚だ困難であり且つ不明のものを極めて多く含む為、一般にはむしろ正確なる data として入婚者に重点を置くべきであり、出婚は之に参考として考えようとする態度をとつた。なお、基礎となる資料は戸籍簿以外になく、即ち明治時代以前の各種の記録は、各方面に亘つて資料の蒐集を試みたが村の内外ともに存在を認めず、そのため明治初年以前の実状は判明しなかつた。又、資料のうち婚姻年代の不明例は、何れも明治以前に婚姻せるものか、明治初年以後明治5年迄の間に婚姻せるものか判然としなかつたものである。

調 査 成 績

調査対象は男子の配偶者に関する婚姻と限定した。又、之が分析に際しては次の如く 3 群に大別して取扱うこととした。即ち、(1) 昭和 32 年 1 月現在の村内居住有配偶者群。(2) 明治初年に於ける在村者の婚姻群。(3) 明治 5 年以降昭和 32 年 1 月迄の間に於いて、村内に本籍を有していた全婚姻群に就いて調査研究した。

1) 昭和 32 年 1 月現在村内居住者群の通婚状況

離別独身者群を含めた婚姻数は 84 例であつて、男子初婚者は 68 例を占めており、その本籍地別の通婚圏は第 1 表の如くであつた。即ち、初婚男子の通婚圏は、村内婚 83.8% の他、東京都内（伊豆七島は行政区劃上、東京都に所属しているので東京都の非島嶼部は以下東京都内と称することにする）4.4%，大島と静

岡県の各 2.9%，その他、式根島、神奈川、茨城、新潟の各県出身者との婚姻となつていた。

一方、再・3 婚男子は第 2 表の如く総数 16 例で、この場合に於ける配偶女子を初婚、再婚別にみると、女子初婚 10 例、女子再婚または 3 婚 6 例で、男子再婚の場合は、式根島 1 例を除く他はすべて村内婚であつた。なお、初婚及び再・3 婚群の合計 84 件の通婚圏を婚姻

第 3 表

年令別	東 京 都			他 県	総 数
	利島村	島嶼部*	都 内		
～ 29	4 (80.0)	1 (20.0)			5 (100.0)
30～39	15 (88.2)		1 (5.9)	1 (5.9)	17 (100.0)
40～49	12 (80.0)	2 (13.3)		1 (6.7)	15 (100.0)
50～59	8 (16.5)		2 (7.7)	3 (23.1)	13 (100.0)
60～69	14 (100.0)				14 (100.0)
70～	4 (100.0)				4 (100.0)
総 数	57 (83.9)	3 (4.4)	3 (4.4)	5 (7.4)	68 (100.0)

第 1 表 現村内居住者群の通婚圏
1 初婚男子の通婚圏（本籍地別）

配偶女子 地 域 別	総 数				初 婚				再・3 婚			
	総数	明治	大正	昭和	総数	明治	大正	昭和	総数	明治	大正	昭和
村 内	57 (83.9)	15 (100.0)	3 (75.0)	33 (80.5)	52 (85.2)	15 (100.0)	7 (70.0)	30 (83.3)	5 (71.4)		2 (100.0)	3 (60.0)
東京都												
非島嶼部	3 (4.4)		2 (16.7)	1 (2.4)	3 (4.9)			2 (20.0)	1 (2.8)			
大 島	2 (2.9)		1 (8.3)	1 (2.4)	1 (1.6)			1 (10.0)	1 (14.3)			1 (20.0)
式根島	1 (1.5)			1 (2.4)	1 (1.6)			1 (2.8)				
静岡県	2 (2.9)			2 (4.9)	2 (3.9)			2 (5.6)				
神奈川県	1 (1.5)			1 (2.4)	1 (1.6)			1 (2.8)				
茨 城 県	1 (1.5)			1 (2.4)	1 (1.6)			1 (2.8)	1 (14.3)			1 (20.0)
新 潟 県	1 (1.5)			1 (2.4)	1 (1.6)			1 (2.8)				
総 数	68 (100.0)	15 (100.0)	12 (100.0)	41 (100.0)	61 (100.0)	15 (100.0)	10 (100.0)	36 (100.0)	7 (100.0)	0 (100.0)	2 (100.0)	5 (100.0)

当時の居住地に訂正してみると、村内 77 (91.7%)、東京都内 3 (3.6%)、大島 3 (3.6%)、静岡県 1 (1.2%) という状況になつていた。

初婚の場合について年代別にみると、村内婚は、明治時代 100%、大正時代 75.0%、昭和時代 80.5% となつて来ており、大正時代の村内婚率は明治又は昭和のそれに比してやや少いが、例数が少ないので必ずしも大正時代より通婚圏が広がつたとは云えないが、然し昭和時代では 41 例中 8 例は村外婚であるから、かなり通婚圏は広がつて来たと考えられる。

また、昭和 32 年 1 月現在の年齢別に全婚姻の範囲をみると第 3 表の如く、60 歳以

第 2 表 現村内居住者群の通婚圏
2 再・3 婚男子の通婚圏

配偶女子 地 域 別	総 数				初 婚				再・3 婚			
	総数	明治	大正	昭和	総数	明治	大正	昭和	総数	明治	大正	昭和
村 内	15 (93.8)	2 (100)	4 (100)	9 (90.0)	9 (100)	1 (100)	4 (100)	4 (100)	6 (100)	1 (100)		5 (100)
式根島	1 (6.3)			1 (10.0)	1 (10.0)			1 (20.0)				
総 数	16 (100)	2 (100)	4 (100)	10 (100)	10 (100)	1 (100)	4 (100)	5 (100)	6 (100)	1 (100)		5 (100)

上に於いては村外婚は全くなく、50～59歳に他県との婚姻が多い。之は大正時代の不況當時に島外に出ていた村外婚をなした者の帰村した為と考えられる。50歳以下では村内婚をなしているものの比率は80%台を下らぬ状態であつた。

2) 明治初年に於ける通婚状況

通婚圏の動向を把握する上の基礎的調査として、所謂壬申戸籍から明治初年に於けるその概況をみると、第4表の如くであつて、戸主たる男子54名のうち無配偶独身者9例を除く有配偶45世帯の配偶者の範囲は、村内婚62.2%で他は入婚者であり、その地域別状況は、神津島33.3%、新島4.4%となつており、即ち全例が本島以南の島に属していた。

第4表 明治初年の通婚圏

通婚の地域	総数 (%)
村 内	28 (62.2)
神 津 島	15 (33.3)
新 島	2 (4.4)
総 数	45(100.0)

3) 明治5年以降の婚姻全群の通婚圏

i) 本籍地別通婚圏：明治5年以降昭和32年1月現在迄の婚姻総数243について地域別観察を行うと、第5表の如くで、村内婚は77.4%で最も多数を占め、東京都内及び近隣の伊豆七島に属する神津島、新島（含、式根島）、大島が之に次ぎ、合計東京都は15.1%（非島嶼部5.3%、本島を除く島嶼部9.8%）で、静岡県2.5%、茨城県1.2%、愛知、福島、山形の各県が各々0.8%、神奈川及び新潟県が各々0.4%の順位を示していた。

年代別にみると、各年代とも村内婚が圧倒的に多いが、その比率は明治87.4%、大正75.6%、昭和69.1%と示された如く次第に低下の傾向が認められ、村外婚の地域別観察を行うと、明治に於いては、村内婚の他は神津島9.5%、新島3.2%であつたが、大正では東

第5表 明治5年以降の通婚圏
（本籍地別）

年代 地域別	総 数	明 治	大 正	昭 和	不 明
村 内	188(77.4)	83(87.4)	34(75.6)	65(69.1)	6(6.7)
東京都					
都 内	13(5.3)		4(8.9)	9(9.6)	
大 島	4(1.6)		2(4.4)	2(2.1)	
新 島	6(2.5)	3(3.2)	1(2.2)	2(2.1)	
式根島	2(0.8)			2(2.1)	
神津島	12(4.9)	9(9.5)	1(2.2)		2(2.2)
静岡県	6(2.5)		2(4.4)	4(4.3)	
愛知県	2(0.8)			2(2.1)	
神奈川県	1(0.4)			1(1.1)	
茨城県	3(1.2)		1(2.2)	2(2.1)	
福島県	2(0.8)			2(2.1)	
山形県	1(0.4)			2(2.1)	
新潟県	1(0.4)			1(1.1)	
不 明	1(0.4)				1(1.1)
総 数	243(100.0)	95(100.0)	45(100.0)	94(100.0)	9(100.0)

京都内8.9%をはじめ、大島、静岡県が各4.4%、ついで新島、神津島、茨城県の各2.2%の通婚があり、更に昭和に入ると、東京都内は9.6%を示し、静岡県4.3%で之に次ぎ、以下大島、新島、式根島と愛知、茨城、福島、山形各県が各々2.1%で、神奈川及び新潟県が1.1%づつの分布を示し、即ち昭和に於いては、大正の1都2県から1都7県に拡がっている。

利島を除く伊豆七島についてみると、総数に於いては9.8%で東京都内5.3%を凌ぎ、村内について之等の地域との通婚が多かつた。然し、年代別にみると、明治12.7%、大正8.8

第6表 明治5年以降の通婚圏
（婚姻当時居住地別）

年代 居住地別	総 数	明 治	大 正	昭 和	不 明
村 内	196(80.7)	90(94.7)	34(75.6)	66(70.2)	6(6.7)
東京都					
都 内	21(8.6)		4(8.9)	17(18.1)	
大 島	5(2.1)		2(4.4)	3(3.2)	
新 島	5(2.1)	3(3.2)	1(2.2)	1(1.1)	
式根島	3(1.2)		1(2.2)	2(2.1)	
神津島	5(2.1)	2(2.1)	1(2.2)		2(2.2)
静岡県	6(2.5)		2(4.4)	4(4.3)	
愛知県	1(0.4)				
不 明	1(0.4)				1(1.1)
総 数	243(100.0)	95(100.0)	45(100.0)	94(100.0)	9(100.0)

%, 昭和6.3%の比率に明かな如く, 通婚圏は島嶼部地域から内地(特に都市)へ向う傾向を窺わしめるものであつた。なお, 静岡県は村内及び東京都について多いが, その殆んどすべては伊豆半島在住者であつたので, 距離的にも他県より通婚頻度の高いことが諒解される。

なお, 村民の東京都内と島嶼部との間の各婚姻比率を比較すると, 明治に於いては東京

都内との婚姻例はなかつたが, 大正, 昭和に於いては, 島嶼部在住者より所謂都内(非島嶼部地域) 在住者との婚姻数の方が多くなつてゐることが注目された。

ii) 婚姻当時居住地別 通婚圏: 従来の所謂寄留地に於いて配偶者を決定したような場合は, 実際の通婚地域は距離的關係から, かなり局限された範囲の狭いものとなることがあるので, 婚姻当時の居住地別通婚状況を調査

した。本村離村者の動向については現在調査中であるが, 種々の事情から遠隔地へ赴く事例は稀であつたことが判明しており, 事実この調査によれば第6表の如く, 婚姻当時の居住地が村内80.7%に比し, 東京都16.1%(非島嶼部8.6%, 本島を除く島嶼部7.5%), 静岡県2.5%, 愛知県0.4%, 不明0.4%に過ぎない状況であつた。即ち, 1都2県(及び不明例0.4%)と関係する通婚圏であつた。前記本籍地別通婚圏と比較すると, 結局, 東京都内に於ける(就中, 昭和年代に於ける)婚姻成立例の増加を指摘することができる。

明治5年以降の初婚男子についてみると, 第7表の如く婚姻総数204のうち, 村内婚は157(77.0%)で, その他島外との婚姻は, 総数に於いては東京都内, 神津島, 静岡県, 新島, 大島の順で, 既述した各県が少数ずつの分布を見せていた。又, 再・3婚男子に就

第7表 明治5年以降婚姻全群の通婚圏
1 初婚男子の通婚圏(本籍地別)

配偶女子 居住地別	総 数					初 婚				再 3 婚			
	総数	明治	大正	昭和	不明	総数	明治	大正	昭和	総数	明治	大正	昭和
村 内	159 (77.0)	73 (91.3)	29 (74.4)	51 (65.4)	4 (5.7)	146* (78.8)	71 (91.0)	26 (74.3)	45 (64.3)	11 (78.6)	2 (100.0)	3 (15.0)	6 (75.0)
東京都													
非島嶼部	12 (5.9)		4 (10.3)	8 (10.3)		12 (6.3)		4 (11.4)	8 (11.4)				
大 島	4 (2.0)		2 (5.1)	2 (2.6)		3 (1.6)		2 (5.7)	1 (1.4)	1 (7.1)			1 (75.0)
新 島	5 (2.5)	2 (2.5)	1 (2.6)	2 (2.6)		4 (2.1)	2 (2.6)		2 (2.9)	1 (7.1)		1 (25.0)	
式根島	1 (0.5)			1 (1.3)		1 (0.5)			1 (1.4)				
神津島	8 (3.9)	5 (6.3)	1 (2.6)		2 (28.6)	5 (4.2)	1 (6.4)	2 (2.9)					
静岡県	6 (2.9)		2 (5.1)	4 (5.1)		6 (3.2)		2 (5.7)	4 (5.7)				
愛知県	2 (1.0)			2 (2.6)		2 (1.1)			2 (2.9)				
茨城県	2 (1.0)			2 (2.6)		1 (0.5)			1 (1.4)	1 (7.1)			1 (75.0)
福島県	2 (1.0)			2 (2.6)		2 (1.1)			2 (2.9)				
山形県	2 (1.0)			2 (2.6)		2 (1.1)			2 (2.9)				
新潟県	1 (0.5)			1 (1.3)		1 (0.5)			1 (1.4)				
神奈川県	1 (0.5)			1 (1.3)		1 (0.5)			1 (1.4)				
不 明	1 (0.5)				1 (14.3)	1 (0.5)							
総 数	204 (100.0)	90 (100.0)	39 (100.0)	78 (100.0)	7 (100.0)	190 (100.0)	78 (100.0)	35 (100.0)	70 (100.0)	14 (99.9)	2 (100.0)	4 (100.0)	8 (100.0)

×年代不明4, ××年代不明2, ×××年代不明1を含む

第8表 明治5年以降婚姻全群の通婚圏
2 再・3婚男子の通婚圏(本籍地別)

配偶女子 居住地別	総 数					初 婚				再 3 婚			
	総数	明治	大正	昭和	不明	総数	明治	大正	昭和	総数	明治	大正	昭和
村 内	31* (79.5)	10 (66.7)	5 (83.3)	14 (87.5)	21* (72.4)	6 (54.5)	5 (93.3)	8 (80.0)	10 (100.0)	4 (100.0)			6 (100.0)
東京都													
非島嶼部	1 (2.6)			1 (6.3)	1 (3.4)				1 (10.0)				
新 島	1 (2.6)	1 (6.7)			1 (3.4)	1 (9.1)							
式根島	1 (2.6)			1 (6.3)	1 (3.4)				1 (10.0)				
神津島	4 (10.2)	4 (26.6)			4 (13.8)	4 (36.4)							
静岡県	1 (2.6)		1 (16.7)		1 (3.4)	1 (16.7)							
総 数	39 (100.0)	15 (100.0)	6 (100.0)	16 (100.0)	29 (100.0)	11 (100.0)	6 (100.0)	10 (100.0)	10 (100.0)	4 (100.0)			6 (100.0)

*年代不明2を含む

いては第8表の如く、その通婚地域は、村内79.5%の他は、東京都内、神津島、新島、式根島及び茨城県によつて占められていた。

総括並びに考按

東京都利島村の通婚圏に関して調査研究した成績によると、内地に於ける僻地とも異なる興味ある知見を得られたが、以上を総括し、二、三の考按を試みた。

1) 現在村内居住者群に於いては、村内婚が圧倒的に多く、通婚圏は近年に於いて若年者層に離村向都の傾向がある為、狭い乍らも拡大しつつはあるが、それにも拘らず村内婚の多い結果であつたことは、畢竟、財産権の問題、或は島嶼という特殊条件に起因するものであろう。又、再・3婚男子に於いて93.8%が村内に配偶者を選んでいることは、女子側に男子以上の配偶者選択難が存在する証左とも見做される。

2) 明治初年に於いては、通婚圏は伊豆七島に属する利島、神津島、新島に限られていた。之は当時の交通上の大きな制約と未だ産業並びに人口上の問題が少かつた為と思われる。その他、神津島との通婚が極めて多数(33.3%)を占めていたことは、その後明治時代以後に於いて殆んどこの島との通婚が存在しなかつたことからみても、甚だ特殊な現象と指摘せざるを得ない。記録には詳かでないが、当時、神津島女子の結婚難と同時に、本村の結婚適齢期の女子が極めて少かつたことによつて、本村への集团的入婚があつたと云われているので恐らく之が為の一時的特異現象であつたと思われる。

3) 明治5年以降の婚姻全群の通婚状況は、村内婚は勿論圧倒的に多いが、年代別にみると漸次減少の傾向は示しており、当初は村外婚は、伊豆七島に属する島嶼との間に多かつたが、その比率も次第に減つて、内地就中東京都内との通婚が増加の傾向にあることが判明した。交通、文化の向上と産業経済上の理

由から離村者の増加したことによるものと考えられる。

結 論

東京都利島村の通婚圏(入婚)に就いて調査研究した結果、本村の通婚圏は過去に於いては甚だ狭く、村内婚が圧倒的な頻度を示していたが現在なお極めて狭いことが判明した。一小孤島であるという地理的特殊条件(特に交通と地勢の齟齬す生活上の悪条件)と之に伴う風俗慣習の内地との相違に基づく婚姻成立上の制約等の影響によつて、配偶者を必然的に周囲近隣に見出さねばならぬ事情の潜在することが最大の素因をなしていると考えられるが、再・3婚の場合に於いてさえも通婚圏の狭いことからみても、如何に本村の通婚圏が限定されたものであるかが判明した。

拙筆するに当り、終始御懇篤なる御指導、御校閲を賜つた恩師柳沢文徳教授並びに宮本璋教授に厚く感謝の意を表します。

文 献

- 1) 徳山頼正：一山間部落の結婚に関する研究，第1報，お茶の水医誌，6，967，(1958)
- 2) 岩井貫一：柑橘栽培村の婚姻並びに出生に関する研究，第1報，民族衛生，24，230，(1958)
- 3) 平川達：一島嶼（伊豆七島利島）に於ける婚姻の調査研究，第1報，民族衛生，本紙掲載。
- 4) 平川達：一島嶼（伊豆七島利島）に於ける婚姻の調査研究，第2報，民族衛生，本紙掲載。
- 5) 柳沢文徳，平川達：孤島の衛生（伊豆七島利島村），厚生の指標，4，(13)，24
- 6) 平川達：椿栽培一島嶼（東京都下利島）の農村厚生医学的研究，第1報，民族衛生，24，75，(1958)
- 7) 平川達：椿栽培一島嶼（東京都下利島）の農村厚生医学的研究，第2報，民族衛生，24，86，(1958)
- 8) 平川達：椿栽培一島嶼（東京都下利島）の農村厚生医学的研究，第3報，民族衛生，24，178，(1958)

RACE HYGIENE

Vol. 25, No. 2

March, 1959

Studies on Marriage in Toshima Island of Izu, Tokyo

Part I. A Survey of Family-Lines in Toshima Island

Part II. A Survey of Marriage in Toshima Island

Part III. The Range of Mating in Toshima Island

Part IV. A Survey of Birth and Birth-control in Toshima Island

Part V. On the Consanguineous Marriage in Toshima Island

By

Toru HIRAKAWA

It is revealed by fundamental researches of the author, which have been reported in "Race Hygiene" (Vol. 24, No.1, No. 2, & No. 4), that Toshima Island, Izu, Tokyo is the poorest farm-village being scanty of its area, population, natural resources, and cultural-level comparing with other island of Izu, and has peculiar characters in many points. As it was considered, to make these characters clear, that the author had to examine the marriage situation which seemed to be closely connected with this problems, further researches about marriage were made in January, 1957. The result were as follows:

1. A survey of family-line; According to the investigation on the 54 families, all of which had been continuing from the 5th year of Meiji to 32nd year of Showa (1872~1957), All the families were relatives to each other, whether close or not, by marriage in antecedent generations.

2. A survey of marriage; Among 243 examples, 190 cases married once, 10 cases twice, and among the rest, only one side married for the second time.

The average age of the first marriage was 24.0 in male, and 19.7 in female. The difference of age between husband and wife was, in average, 4.1. It was recognized that the age of first marriage in male became older in Showa days.

Among 84 married people in this village at present, 18.4% married twice. Besides, majority of remarriage occurred because of the separation by death.

3. The range of mating; In this research of the range of mating, among 84 married people in this village, the marriage among the same villagers was 83.8% recently, however, the range of mating becomes, more or less, wider.

4. A survey of birth and birth-control; The average number of birth of a woman was 3.5, which is not so high. The number of birth tended to decrease in younger generation. According to the survey on birth-control, among 48 answers of whom used to practice birth-control, the economical reason proved 27.1%. Besides, it was remarkable that artificial abortion was popular.

5. Consanguineous marriage; The frequency of consanguineous marriage was 11.9 per cent, among which the marriage between consins were the most. The 1.62 per cent of the whole population were psychotic. This percentage is rather high comparing with other island of Izu. It was also noticed that there would be some consanguineous relations among these psychotics.

Using Prof. Koike's classification, it was recognized that finger-prints were frequent in the type S and in the type OW in hand.

(From Institute for Medical Research of Rural Welfare, Faculty of Medicine, Tokyo Medical and Dental University, Tokyo)

Studies on the Blood Pressure Level of Inhabitants in a Farm-village
of the Tohoku District and the Analysis of Its Related Factors

By

Eiko OHBA (Mrs.)

The blood pressure of 3,832 inhabitants, over 90 % of the villagers aged older than six in a farm-village of the Tohoku district, was measured through each season of a year, and the influence of individual factors—such as physique, profession, diet, labour, and pregnancy—upon the blood pressure level was studied. The results obtained were as follows:

1 Though the systolic and diastolic blood pressure rose according to age, on the systolic there was found a significant peak in males between 20 and 24, and in females between 15 and 19. On the diastolic there was not found such a remarkable rise, therefore pulse pressure became higher in the above mentioned age groups.

2. Seasonally, the systolic was highest in winter and lowest in spring, and diastolic was high both in winter and in summer for males. For females the systolic was higher both in winter and in summer, and the diastolic was higher rather in summer, and lowest in spring.

3. The correlation between blood pressure and body-height and-weight was clearly found in the developing ages of adolescence.

In females some correlation between blood pressure and weight was recognized also in the climacteric ages.

4. The positive correlation of between children and their parents was proved about blood pressure by χ^2 -test.

5. In females, the level of the systolic was higher in the families of farmers than in those of non-farmers.

6. Females of farming families who had smaller rice field areas showed the higher diastolic. In both sexes, families who had larger vegetable field areas had the lower systolic.